

報告

第三十五回經濟研究会報告

九月三十日(火) 於 經濟学部研究室

発表者 古米淑郎助教授

テーマ アメリカ自動車工業における

一九五八年の団体交渉について

(出席者)

小松、中西、宗藤、松井、黒松、今西、中島、相見、岩根、西川(良)、伊藤、田口、入江、笹田、

黒田、辻、榊原、野間、渡辺、山下、村田、湯

浅、小林、西川(宏)

經濟研究会主任宗藤教授の司会のもとに古米助教授の研究発表が次の要旨で行われた。

アメリカ自動車工業における新しい労働協約の締結をめぐる団体交渉は、この春いろいろ難航を続けたが、さる九月十七日にフォード社が妥結したの手がかりとして、ようやく解決のきざしが見えた。

生産性向上に見合う成果の配分を要求する組合側と、特有の需要変動および独占的競争のための備えの必要などから、支払能力の不足を主張する会社側との団体交渉は、オリゴポリーに

おけるアドミニスタード・プライスと賃上げによるコスト・インフレーションとの切り結びのかたちで争われたが、折からの景気後退のもとでの事業不振が加わり、会社側の態度はすこぶる強硬で、ついに前協約の満期日までに妥結をみるに至らず、組合側は無協約のまま就労を続けた。

その間、一時解雇の続出と財政のひっばくのため組合は苦境に追い込まれ、ようやく妥結したフォード社との協約においては、補足失業補償制度と年金制度の改善が実現したほかにはみるべき成果がなく、組合側の敗色はおおうべくもない。